

## 第2回 第1部 課題発見・課題解決能力を育むコミュニティ・スクール



文部科学省 総合教育政策局 社会教育振興総括官（兼）政策課長  
寺門 成真 氏

茨城県生まれ。1991年4月、文部省入省。  
文化庁、初等中等教育局、高等教育局、石川県等の勤務を経て、2008年9月、教育政策全般のとりまとめである文部科学省生涯学習政策局政策課教育改革推進室長に就任。  
復興庁総括官付参事官、高等教育局医学教育課長、内閣官房人生100年時代構想推進室参事官等を経て、2018年4月、生涯学習政策局政策課長に就任。2019年7月より現職。

### ◆ トークセッション発言要旨

- 新たな学習指導要領が念頭に置いている2030年の社会というものは、人生100年時代、スマート社会、そういった時代背景。確実に変わっていくことは間違いないけれども、そのスピードや責任感、その度合いにおいてこれまでに経験がない、そういう変化を我々は迎えている。その中で教育をどのようにしていくかというのがまさに問題になっている。
- 「社会に開かれた教育課程」が新たな学習指導要領のキーワード。知識の習得をきちんとしたうえで、それを活かして、思考、判断、協議して、それを通して何ができるようになるのか、学びに向かう力とか人間性が非常に重要になる。状況に応じて、自ら目的を設定し、答えが無数にある課題に対して、その最適になる解というものを状況に応じて導き出していく力が教育や学校において求められる。そのために「社会に開かれた教育課程」を推進したいということ。
- これからの学校教育は、よりよい学校教育を実現しようと思ったら学校や教育委員会の教育資源だけでは足りない。いかに学校外の教育資源を動員して子供たちの教育に還元していくかが前提として考えられる。
- コミュニティ・スクールは、ビジョンを学校が、保護者や地域の方と共有し、目的の実現に向けて統合していく仕組み。学校と地域が対等な立場に立ち、子どもの健やかな学びを育成していく、いわば知恵を出し合う参謀本部的な役割を果たす。ここで話し合った内容については、具体的に地域の必要や課題に応じて、また地域の資源に応じて地域学校協働活動という形で、子供たちに様々な具体的な体験の場を提供していく、そういう取り組みが大変重要。

### ◆ 山口県への提言

- （高校における）探究の時間においても、高校にコミュニティ・スクールを配置している中で、これを活かした取り組みがある山口県として、先駆けとして発信していただけるとありがたい。
- コミュニティ・スクールの先進県、トップを走っているがゆえに様々な課題を抱えているのが山口県の現状だと思った次第。コミュニティ・スクールをひとつのトリガーとして教育力の向上を進めてほしい。高等学校へのコミュニティ・スクール導入にも大変期待をしている。
- 中央教育審議会に包括的な諮問している大きな柱は、高等学校教育改革。ぜひ山口県には先進的な例として、議論に影響を与えるような取り組みをしていただきたい。

新しい学習指導要領が見据える、2030年の社会

- ◆「2011年に米国の小学校に入学した子供たちの**65%**は、大学卒業後、今は存在していない職業に就く」  
 - キャシー・デビッドソン氏 (ニューヨーク市立大学大学院センター教授)
- ◆「今後10~20年で、日本の労働人口の**49%**がAIやロボット等で代替可能に」  
 - (株)野村総合研究所(マイケルA. オズボーン准教授らとの共同研究)
- ◆「2045年には人工知能が人類を超える『**シンギュラリティ**』に到達する」  
 - レイ・カーツワイル氏 (アメリカ人発明家)
- ◆「日本では、2007年に生まれた子供の半数が**107歳**より長く生きる」  
 - Human Mortality Database, U.C. Berkeley(USA) and Max Planck Institute for Demographic Research(Germany)

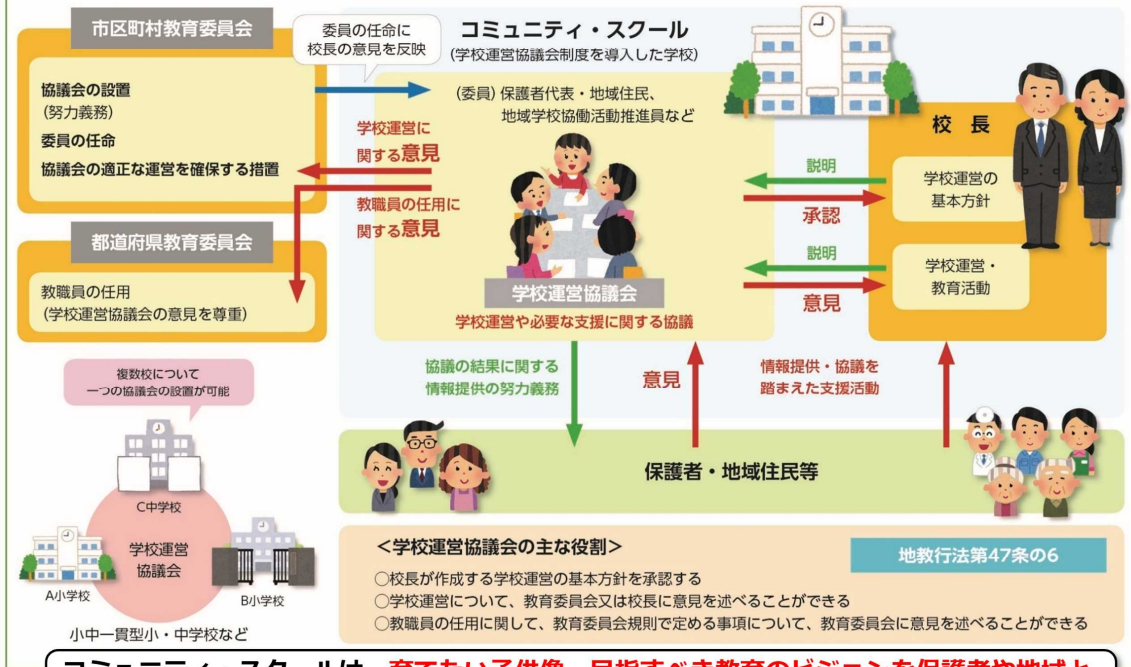


「社会に開かれた教育課程」 — 学習指導要領改訂の方向性 —

< **社会に開かれた教育課程** >

- ① **社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。**
- ② **これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自分の人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくこと。**
- ③ **教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。**

コミュニティ・スクール(学校運営協議会制度)の仕組み



**コミュニティ・スクールは、育てたい子供像、目指すべき教育のビジョンを保護者や地域と共有し、目標の実現に向けてともに協働していく仕組み。**

《様々な地域学校協働活動の例》

**学びによるまちづくり・地域課題解決型学習・郷土学習**

- ◆地域資源を理解し、その魅力を伝えたり、地域活性化のための方策を考え、実行する学習活動
- ◆「ふるさと」について地域住民から学び、自ら地域について調べたり発表したりする学習活動
- ◆地域の産業や商店街の職場体験学習、郷土の伝統・文化芸能学習 など



**放課後子供教室**

- ◆地域住民の参画を得て、放課後等に全ての児童を対象として行う、学習や体験・交流といった多様な活動



**地域未来塾**

- ◆中学生・高校生等を対象に、教員OBや大学生などの地域住民の協力によって行う学習支援



**家庭教育支援活動**

- ◆寄り添いが必要な子供、不登校傾向のある子供等への対応について、保護者が学び合う機会づくり など



**学校に対する多様な協力活動**

- ◆登下校の見守り、花壇や通路等の学校周辺環境の整備、子供たちへの本の読み聞かせ、授業の補助や部活動の支援 など



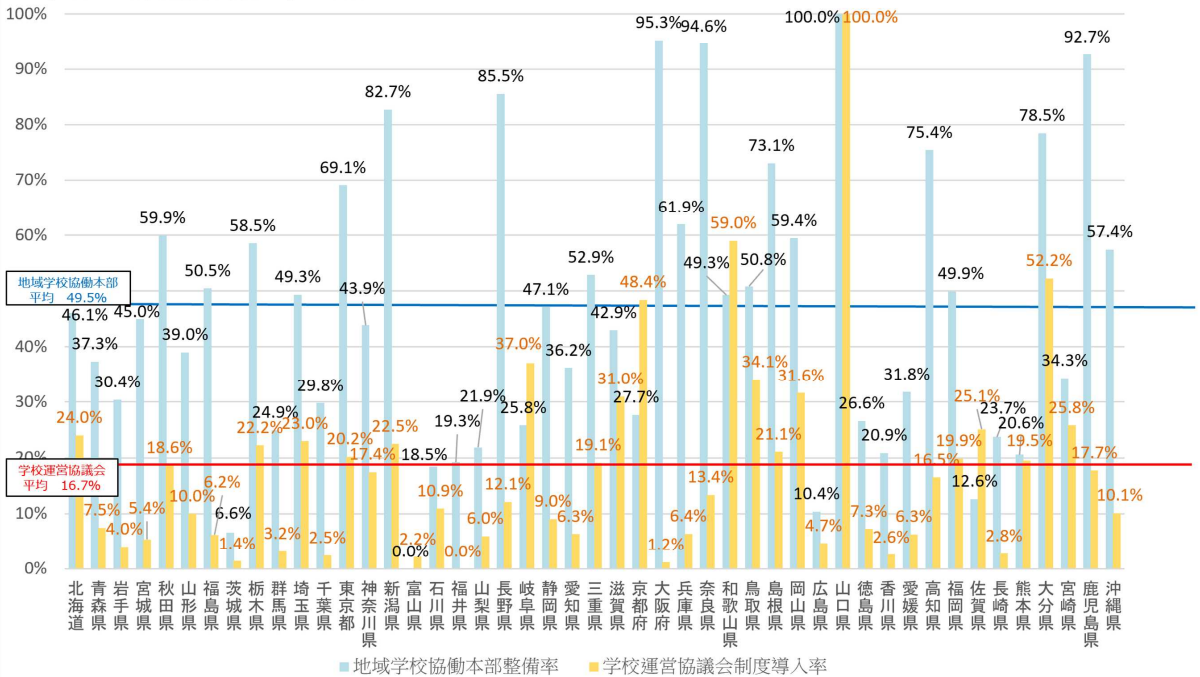
**地域の行事、イベント、お祭り、ボランティア活動等への参画**

- ◆地域イベントにおけるボランティア体験学習、伝統行事やお祭りでの伝統文化・芸能の発表や楽器の演奏、地域の防災訓練への参画 など



# 地域学校協働本部整備率と学校運営協議会制度の導入率（都道府県別）

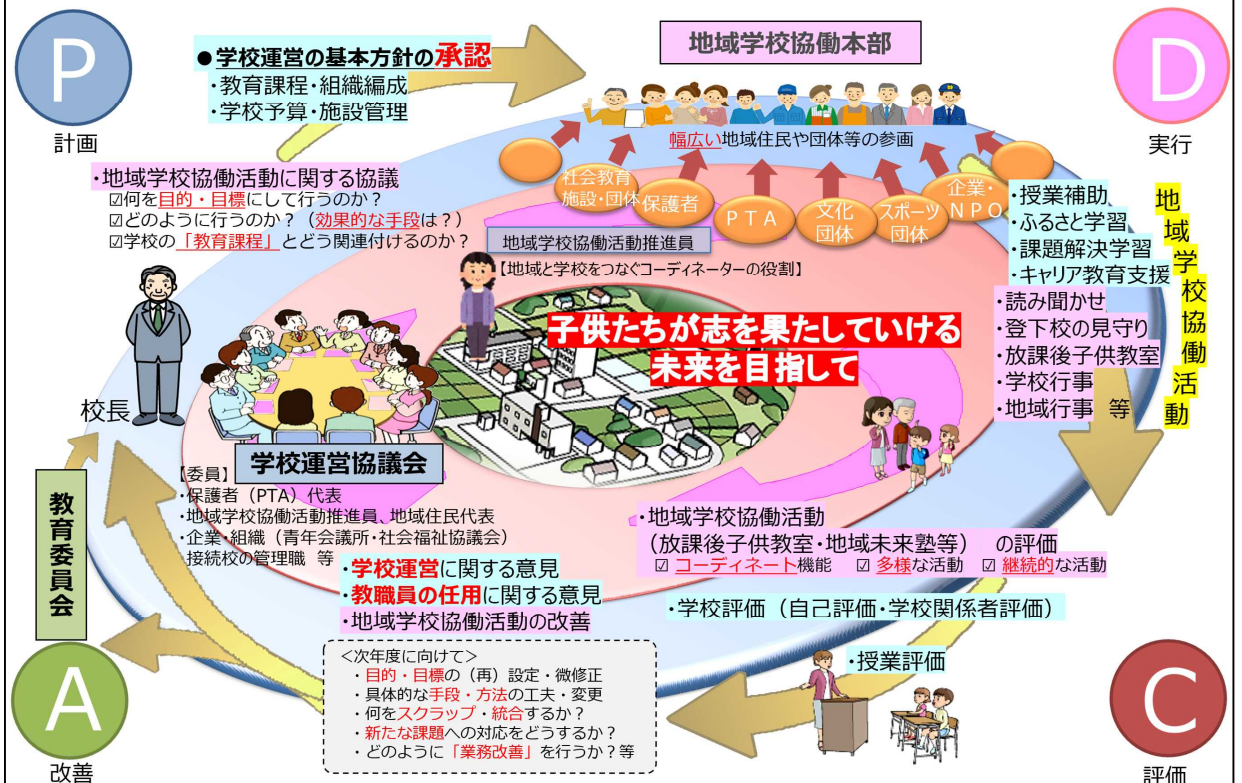
地域学校協働本部が整備されている公立小・中・義務教育学校数：14,194校（小学校：9,874校、中学校：4,284校、義務教育学校：36校）  
 学校運営協議会制度を導入している公立小・中・義務教育学校数：4,796校（小学校：3,265校、中学校：1,492校、義務教育学校：39校）  
 （全国地域学校協働本部数：8,567本部）



文部科学省・国立教育政策研究所社会教育実践研究センター調査  
 （平成30年5月時点）による。国庫補助対象外の取組を含む。

文部科学省コミュニティ・スクール導入状況調査（平成30年4月時点）による。

## コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進



## 一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム 代表理事

### 水谷 智之 氏

2006年(株)リクルートHRマーケティング代表取締役、2007年(株)リクルート取締役(人事・総務・広報担当)を歴任し、人材育成PDSの構築、採用・育成・抜擢要件の構築、次世代経営者育成プログラムを構築。2012年より(株)リクルートキャリア初代表取締役社長に就任し2016年3月末退任。2017年には社会人大学院大学「至善館」理事兼特任教授に就任。2018年経済産業省「我が国産業における人材力強化に向けた研究会」委員、「『未来の教室』とEdTech研究会」委員、内閣官房「教育再生実行会議」委員も務める。

### ◆ トークセッション発言要旨

- ▶ 高校時代に、「力をつけて、いつか山口のために、この山口の未来は自分たちで作りたい。」という意志、**将来帰ってくる原点になる意志を持って卒業するかが究極の到達点**。(従って)社会的感度が最も育つ15~18歳の高校時代を対象に、地域の人づくりをする活動をしている。
- ▶ これまでは、課題解決の答えがあって、重要なのは生産性とスピードであり、組織は一条乱れる統率や、公式・ルール・マニュアルが大事であったが、**これからは答えがあることや予測さえもITがやってしまう。人間が行う仕事は、答えがまだ無い仕事や前例通りではない仕事。小さくても昨日を超えることを導き出せる人が必要**。もっとこうしたいという想いが伸びるかどうか、答えが無いことに対して**勝算が見えなくても一歩目を踏み出すことで変化を起こすことが大事**。**willを育む機会が大切な時代になり、その機会を作ることがコミュニティ・スクールの役割**かもしれない。
- ▶ これからの時代は、プラン通りに進み成果が出るとも限らないことから、その**課題はあなたが見つけた課題か、やりたいエネルギーが動いているかが一番重要**。次に、**失敗するかもしれない一歩目を自身で踏みだしているかが重要**。こういうPBLの機会を作っていけるか、**人生の縮図体験となるようなPBLになっているか重要**。
- ▶ (こうした取り組みを行う上で)課題の1つ目は県立高校と基礎自治体との関係。**基礎自治体は県立高校に簡単には手出しできない。その中でwillとアクションをどう体験させてあげるかという難しさ**。2つ目は、学校を、学校の中にある経営資源だけで経営するのではない経営体はどう進めるか。3つ目は言うまでもなくITの活用。4つ目は**地域で育てたい子ども像について、今までと何を変えたいのかということ**を、**共通認識にすることの難しさ**。
- ▶ (地域と学校との連携の持続可能性と、教員の負担とのジレンマについて)本質は、子どもがワクワクしてイキイキするシーンを、教員が本当に見たい、作りたいと思っているが大事。子どもを真ん中に置くようにして活動することが大切。

### ◆ 山口県への提言

- ▶ **大事なのは大学時代**。大学時代に出ていった学生が、都会に自分をアジャストさせることに必死になるため、地域がどれだけ18歳まで頑張っても、それが薄れる時間となる。それをどのように繋いでいか、**いつか山口のためという思いを失わずに膨らませる4年間に出来るかというのが、教育改革と地域の未来づくりに直結する**。
- ▶ キーワードは「**憧れの連鎖**」。高校生のプロジェクト学習、地域で育まれたという実感を感じるような課題解決型学習の時間は原体験、種になる。そのプログラムに、**島根県出身や島根県から出た学生に、サンライズ出雲の30席を用意する**。この大学生たちが高校生の挑戦プログラムのサポーターに入る。そこに島根の大人、県の5部長、副知事、島根の若手経営者、財界トップ、大学学長に入ってもらい、**島根で挑戦したくなる島根づくりを、高校生を真ん中にして、あこがれの背中を持った若手経営者が混ざって行うという場を設けている**。憧れのかっこいい大人の姿を県内に見せることで、必ず戻ってくる。これがキャリア教育の根底だろうと思う。
- ▶ 「**憧れの連鎖**」ができていくことが、**コミュニティ・スクールを作って本当に良かったと地域も思えるもの**だと思う。
- ▶ **コミュニティ・スクールは、子供の前に立って大人が変われるか、外野ではなく当事者にしていく流れをどう作るか**。応援団ではなく、山口県の人づくりに責任を持つという経営者を少数でも集めて、リードしてもらって変えてもらいたい。

## 高校の魅力化を起点に地域の活性化と人材還流を

- ✓ 都道府県による高校設置の中で、高校は地域と接続・最適化できないぬじれの構造に
- ✓ 地域みらい留学の導入により、生徒募集に向けて高校と自治体が接続・最適化する力学に



## ●これからの時代に、必要なチカラはなんだろう？

(これまで)

前例が活きる時代、課題解決の解があり、重要度は『スピード、生産性』

☞一糸乱れぬ統率、最適解、公式、ルール、マニュアル

☞正解のあることはIT、予測可能なこともIT。  
そんな時代が来ることは、避けられない

島根県庁管理職  
研修より抜粋

(これから)

進化が早すぎる時代に、人間は正解のない仕事・前例通りでない仕事？

変化を生み出そうとする人 (小さくても)

## 変化を生み出そうとする人（小さくても）

『前例なき課題への挑戦・想い』 = **WILL**

『勝算なき一歩目を踏み出す力』 = **ACTION**

### 圧倒的な当事者意識

自分の仕事でなくとも、勝算がなくとも、  
自分事としてとらえるスタンス

### 考え抜く・やり抜く姿勢

いかなる状況があってもそれを言い訳にせず、  
99%でなく100%を追い切るスタンス

### 自ら変わり続ける勇氣

自らの経験、成功体験に拠らず、常に進化し  
ようと挑戦し続けるスタンス

### 個よりチーム優先の精神

周囲の信頼、組織の求心力のため、いざとい  
う時に自分よりチームを優先できるスタンス

4  
つ  
の  
ス  
タ  
ン  
ス

### 構造で捉え俯瞰してみる力

本当に解くべき問題は何かを事実をもとに  
多角的に体系立てて考える力

### 本質を特定する力

事実として定量的に、事実としても定性的兆しをつか  
み、問題の原因を特定する力

### 筋のよい仮説を立てる力

物事の本質を洞察し勘所よく肝を掴む力

### プロセスを作りこむ力

課題遂行の道筋をたてゴールに至る工程を  
設計する力

### ビジョンを打ち出す力

自らの考えを明確に打ち出し、ゴールを示す。それを覚  
悟と論理をもって、組織に伝えエネルギーに変える力

### 人を理解し、導く力

人のエネルギーを高め、目指す方向に人を引っ張る力

見  
立  
て  
る

仕  
立  
て  
る

動  
か  
す

6  
つ  
の  
ス  
キ  
ル

● そう、実社会（地域社会）の中で、自分でワクワクする課題（WILL）を見つけ、  
正解のない中でも、《一歩目を踏み出す力（ACTION）》  
これこそが課題発見・解決型学習

ホンモノのPBLとは、**人生の縮図体験**

**課題設定（WILL）** > 課題解決プラン < **ACTION（学び）** > 成果

## 実現への課題

### 1) 県立高校と基礎自治体のねじれと、責任の所在

- ☐ 小中学校に比べ、高校と地域の連携が進まず、学内にとどまったPBLしか進まない。
- ☐ 総合学習（週2時間程度）ではWILLは育まれず、ACTIONの時間もない。形だけのPBLの横行

### 2) 生徒減少に伴う資源（生徒、教員、予算・・・）の漸減。

- ☐ 地域と学校を繋ぐ「魅力化コーディネーター」の採用・育成・配置
- ☐ 全国・海外からの生徒獲得で、刺激、前向き、多様性を担保・・・地域外流失防止へ

### 3) 教育現場におけるIT活用の圧倒的な遅れ

- ☐ 遠隔教育、個人ごと教育（個別最適化教育）へ

### 4) 新学力観、もしくはその地域で育てたいチカラの不統一

- ☐ 地域行政・教員（管理職含む）・父兄・地域住民



## ご提案

### ①教育改革と地域創造人材育成をいかに結び付けられるか。

人材還流統合システムの構築へ（次ページご参考）

- ☞ 高校卒業時に「力をつけ、いつか山口を、故郷の未来を自分たちで創りたい」という思いで送り出すか。
- ☞ 県外流出後も地域との関係を“深くつなぎ続ける機会”とロールモデルとの“憧れの連鎖”
- ☞ 教育委員会マターでなく、政策企画、地域振興、商工労働、総務（財政・人事）そして民間企業経営者

狩猟型人材マネジメントから農耕、養殖型人材マネジメントへ

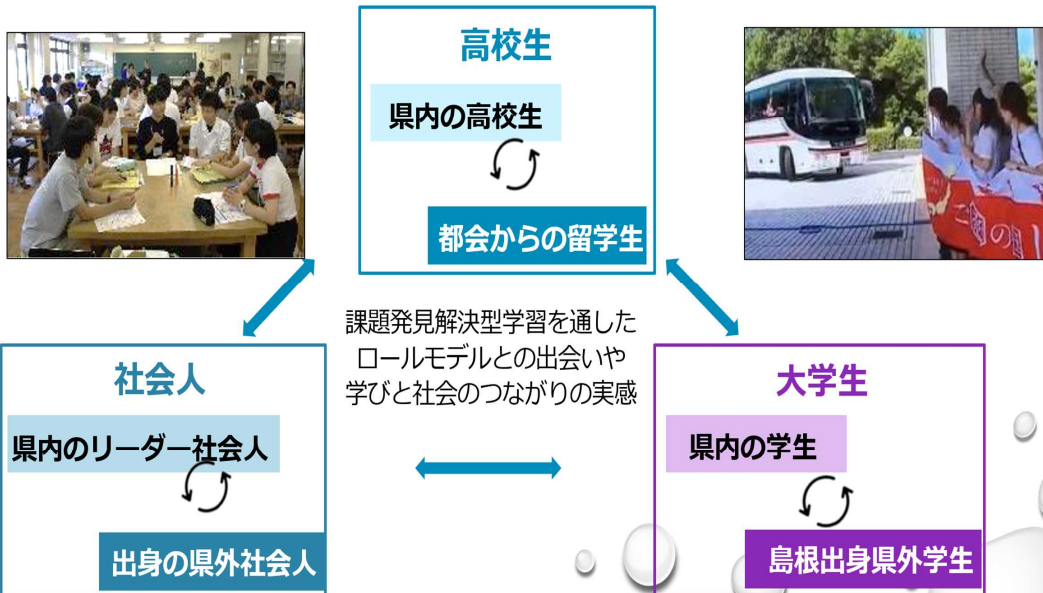
### ② 都会・海外からの留学生をきっかけとした、多様な教育環境

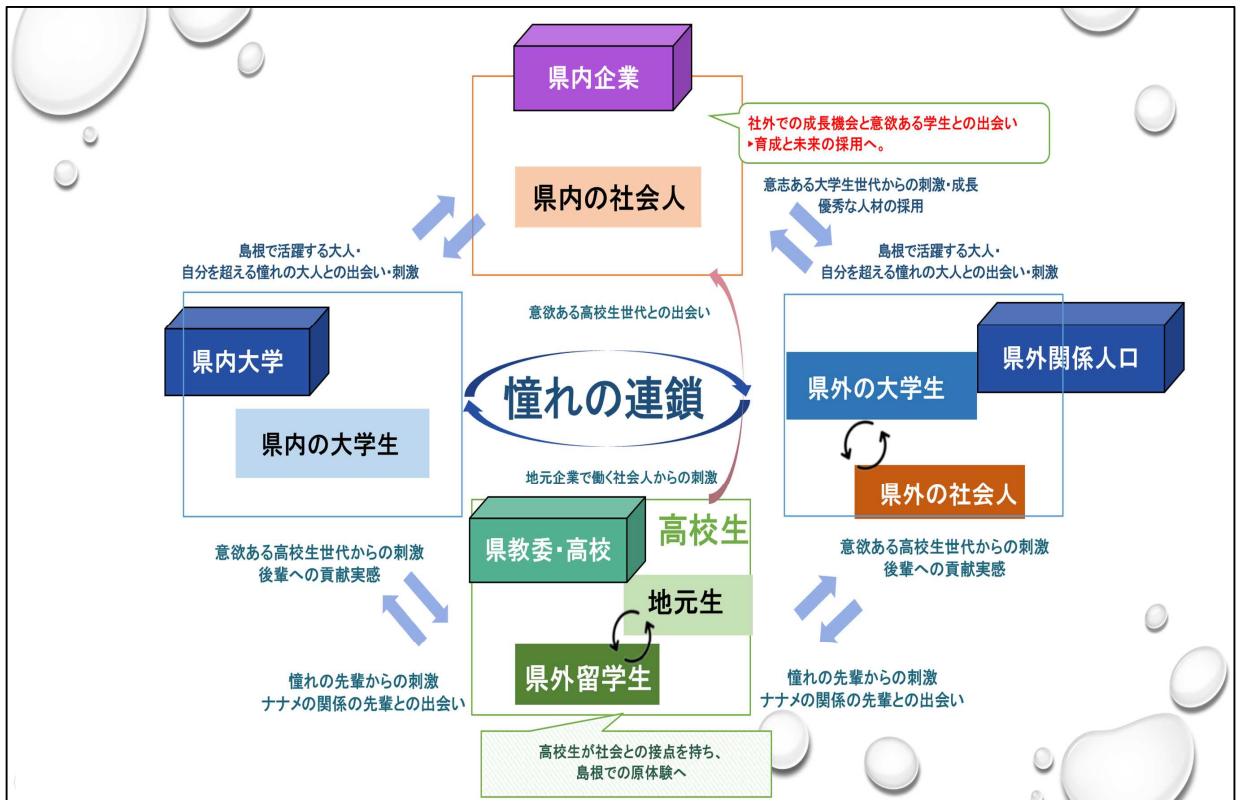
= 地域みらい留学

- ☞ 高校環境の魅力化は流出防止とともに、将来回帰希望率の向上。さらにはIターン予備軍づくりへ

## 「しまねマイプロジェクト」 （8月：スタート合宿 ～ 2月：最終発表会）

高校生の課題発見解決型学習を、地元出身大学生や地元企業の若手リーダー社員がメンターとなりサポート。学校だけでは実現できない多様性のある場を創り出す。





## ■ 地域と教育の多様性を育む「地域みらい留学」

### 参考②

#### 「地域みらい留学」とは…

高校入学時点で親元を離れ、それまで育った都道府県外の高校へ進学し  
地域という実社会で、世代を越えた多様な人々と、社会の縮図体験としての3年間を過ごす

#### 【地元進学生】 にとつての利点

- ① 外部生から知る  
地域の本質的価値
- ② 都会に出なくとも得られる  
都会以上の多様性
- ③ 意欲が高い外部生の刺激から学ぶ  
主体性

#### 【都道府県外入学生】 にとつての利点

- ① 濃密なコミュニティで学ぶ  
多様性との対話
- ② 手触り感ある社会課題の中で学ぶ  
社会感度と主体的意志、WILL
- ③ 残る自然、豊かな食文化  
誇れる治安



## 株式会社studio-L 代表取締役

### 山崎 亮 氏

1973年愛知県生まれ。大阪府立大学大学院および東京大学大学院修了。博士（工学）。コミュニティデザイナー。社会福祉士。建築・ランドスケープ設計事務所を経て、2005年にstudio-Lを設立。地域の課題を地域に住む人たちが解決するためのコミュニティデザインに携わる。まちづくりのワークショップ、住民参加型の総合計画づくり、市民参加型のパークマネジメントなどに関するプロジェクトが多い。

#### ◆ トークセッション発言要旨

- ▶ コミュニティ・スクールとあるが、実際は限られた人だけがやっている。地域の人たちは、おそらく学校を変えられるとは思っていない。児童や生徒だった時代から学校を変えられると思うなよと先生に言外に教えられてきたから。
- ▶ 生徒たちが学校を変えられるようにすることが重要。あるいは地域の市民たちが学校の問題に深く関わっていき、ここを変えたという実感を持つような経験を1つでも多く増やさなければならない。
- ▶ 地域の一役を担うような学校を、生徒や市民が変えられると信じられるようにしていかななくてはいけない。真のコミュニティスクールはそれだと思ふ。学校に地域の人たちが入ってくることはいいことだが、入ってきても、学校のしきたりの中でしか動けないのであれば意味が無い。入ってきて学校の仕組み自体をダイナミックに変え続けること、いろんな人たちが変え続けること、先生たちもそこに意見が言えるし、地域の人たちも主体になれるという状況をいかにつくるか、こういったことをコミュニティ・スクールの中でできたらいいと思ふ。
- ▶ コミュニティ・スクールに来る人たちを増やすこと、継続的に、本人たち自身が組織化するなど、うまく回していくためには、(ワークショップで大切なことは、) 誰かが正しさと楽しさのバランスをとっておくこと。正しさの方向に移行しがちだが、正しい話が續くと、つまらない。コミュニティ・スクールに行けば楽しい気持ちいい体験ができるか。学校と地域が対等な立場で話し合いや楽しみ合いの環境を作ることや、楽しさから入って正しい話をしていくという戦略が必要。
- ▶ 楽しさとは一体何か。本当の意味で楽しめると思える仲間をつくり学校に入り込んでいけばいいし、教員も楽しめるものを課外活動の一つとして地域と一緒にやっていく。そういった場が教育の中にあつた方がよい。

#### ◆ 山口県への提言

- ▶ 世界中の高校生に実施されている、あなたたちは社会を変えることができるかというアンケートがあるが、北欧、フランスは高く、80%くらいは変えられると思っているのに、日本は16%くらいの高校生しか社会を変えられると思っていない。自分たちが学校のルールを変えたことがあるか、自分たちが学校運営に関わって何か状況を変えることが出来たかどうか影響している。自己効力感がないまま、自分が力を発揮した感覚のないまま、大学で都会に出た場合、就職して徐々に出来るが増えていくと、あこがれる人がいる、あこがれてくれる人がいる場所が都会になってしまう。
- ▶ 早くから自分に何かができるという自信を付けるという状況を、学校、地域で作った方がよい。憧れの連鎖を動かすためにはもちろん学校だけではできないが、連鎖の中で、自分自身が何かができるか、力を認めてくれる人たちの輪を、地域の中で18歳までにどれだけ作ることが出来るのか、がコミュニティ・スクールに求められているものではないか。
- ▶ 学校教育では、デザイン、アートがもう少し幅を利かせてもよい。他者と違うことが認められる世界であり、どれだけはみ出したか、それが成長の過程でどれほど良いことかを発言できる教員がいない。
- ▶ 行政は変革を生む人と組めるかどうか重要になる。また出ていくものを追わないというのも重要で、出ていく先で地域を宣伝してもらおう。出ていった人や外の人とどれだけ組めるかということ意識すべき。

# 智頭町総合計画

(鳥取県)

## 総合計画の副読本『智頭町の地図帖』



町民と行政が共通の目的に向かって、まちづくりをおこなうための「道しるべ」



町民のみなさんが目標を実現するための手助けとなる材料を地図帖のスタイルにまとめたもの

## 町民ワークショップの開催

### 智頭暮らしワークショップ①



## まちなかに新しいスポットがオープン



## 次世代の担い手づくり ふらっとchizu



### ◆学校づくりと地域づくりは両輪

・地域づくりに参加する住民が少ない。地域を変えられると思えない？

・学校づくりに参加する住民も少ない。学校を変えられると思えない？

・そりゃそうだ。児童や生徒だった時期から「学校を変えられると思うなよ」と言外に教えられてきた。生徒の自治など夢だと。答えはすでに決まっている。

→そういう経験を繰り返して諦めさせられた大人たちが暮らす地域。投票率が上がる気がしない。「どうせ変わらないんだから」。

・それよりは偏差値を上げて都会の優秀な大学へ。高校は人材流出施設を目指す。グローバル人材を！（そしていつかふるさとへ戻って活躍を。。。）

→戻ってこない。戻ったって地域は自分たちの意見を聞かないし、変えることができないんだから。答えは先生が、役所が決めているんだから。

・学校を生徒たちが変えられるように。地域を市民たちが変えられるように。

→地域の一翼を担う学校を、生徒や市民が変えられると信じられるように。

→真のコミュニティスクールへ。